

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トンピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2019年は9万7千トンとなりました。

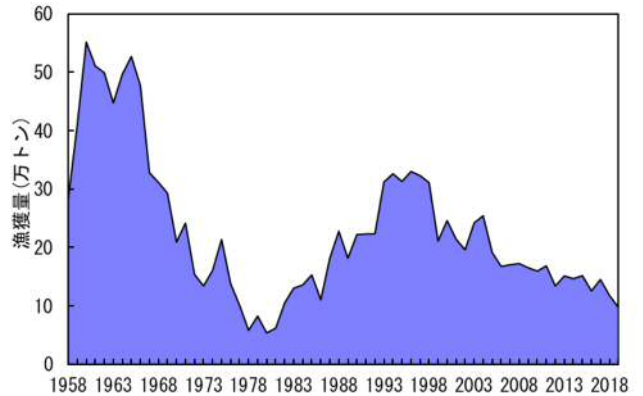


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2021年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、10月に西沖でマアジ大、中（2～3歳魚：2018～2019年生まれ）主体の漁場が、長島でマアジ仔（0歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。11月に甑東でマアジ大、中（2～3歳魚：2018～2019年生まれ）主体の漁場が、串木野沖でマアジ小、仔（0～1歳魚：2020～2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に串木野沖でマアジ豆、小（0～1歳魚：2020～2021年生まれ）主体の漁場が、牛深沖でマアジ中（2歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、12月に志布志沖でマアジ中小、小（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で285トンの水揚げで、前年の35%及び平年の43%でした。

3. 県内の2022年1～3月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小、豆（1～2歳魚：2020～2021年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジの2021年生まれ主体に2020年生まれが混獲されることが予測され、前期の漁況より前年・平年を下回ると考えられます。

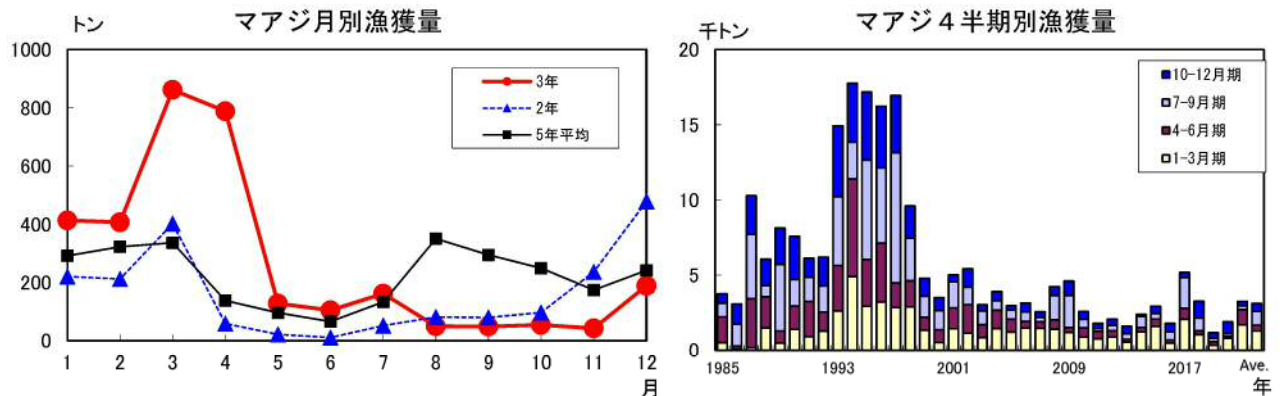


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年12月22日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、2019年は45万トンとなりました。

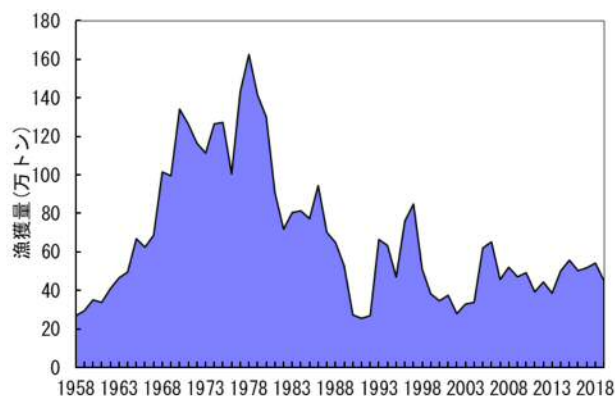


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の2021年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、11月に五島下、男女群島でサバ類小、中（1～3歳魚：2018～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に五島下でサバ類大、中（2～4歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が、串木野沖でサバ類小、豆（0～1歳魚：2020～2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、10月に開聞沖、坊津沖でゴマサバ豆（0歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。11月に坊津沖でゴマサバ豆（0歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に西沖でゴマサバ中小（2～3歳魚：2018～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,520トンの水揚げで、前年の64%及び平年の47%でした。

3. 県内の2022年1～3月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ中小～大（3～6歳魚：2016～2019年生まれ）

マサバ中小～大（3～6歳魚：2016～2019年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、ゴマサバの産卵親魚群とマサバの産卵親魚群が漁獲の主体となります。サバ類の主要水揚げ港である枕崎港における前期のゴマサバとマサバの漁模様から、前年並で平年を下回ると考えられます。

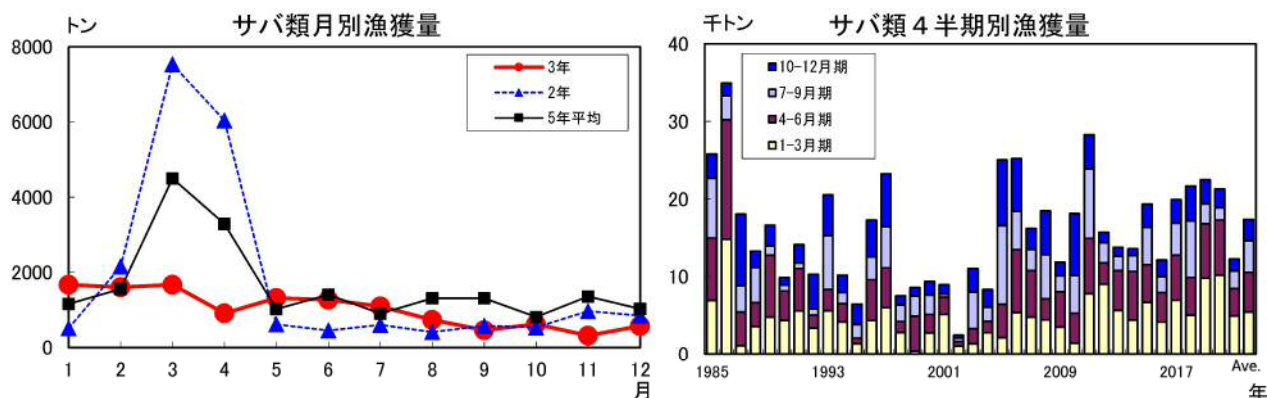


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年12月22日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2019年には56万トンとなりました。

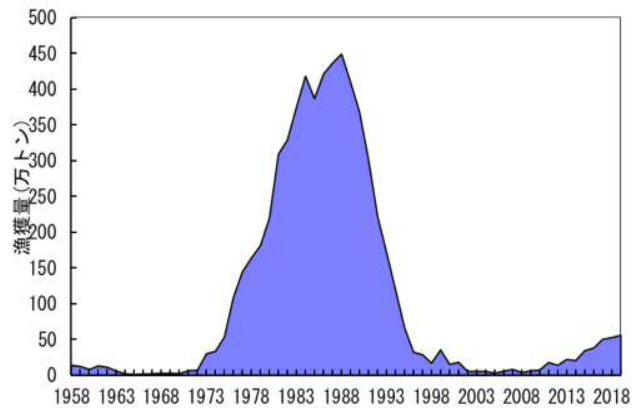


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の2021年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、漁場は形成されなかった。

薩南海域のまき網では、10月に枕崎沖、10～11月に坊津沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期前半は大羽（1歳魚：2020年生まれ）主体、期後半は小～中羽（0歳魚：2021年生まれ）主体に328トンの水揚げで前年の18%、平年の53%でした。

北薩海域の棒受網では、5トンの水揚げで前年の2%、平年の9%でした。

3. 県内の2022年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲主体となる中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）は、前期に期を通して低調に推移したことから、前年・平年を下回ると考えられます。

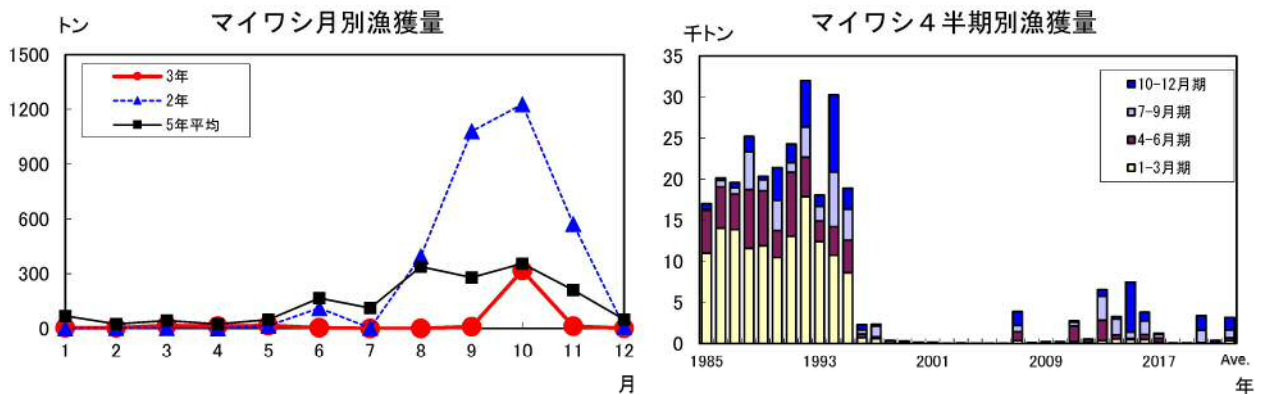


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年12月22日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりましたが、2019年は5万4千トンと大きく減少しました。

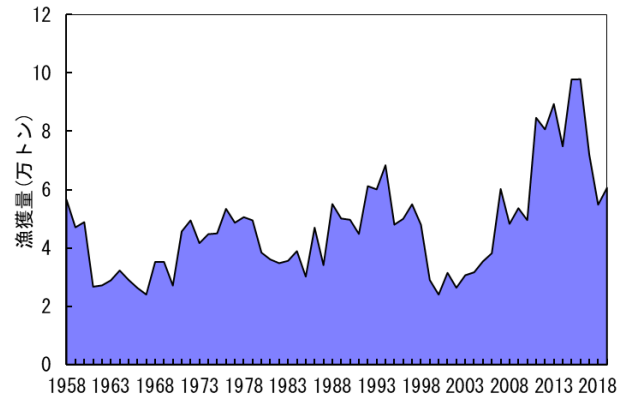


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2021年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10月に縄瀬、阿久根沖、11月に甑東、12月に天草沖、串木野沖で小規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10月に枕崎沖、開聞沖、野間池沖、10～11月に坊津沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期前半は大羽（1歳魚：2020年生まれ）主体、期後半は小～中羽（0歳魚：2021年生まれ）主体に1,614トンの水揚げで、前年の108%及び平年の74%でした。

北薩海域の棒受網では、210トンの水揚げで、前年の188%及び平年の65%でした。

3. 県内の2022年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽主体（1歳魚：2021年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）が漁獲主体となります。前期の漁況を基に予測すると今期は、前年並で平年を下回ると考えられます。

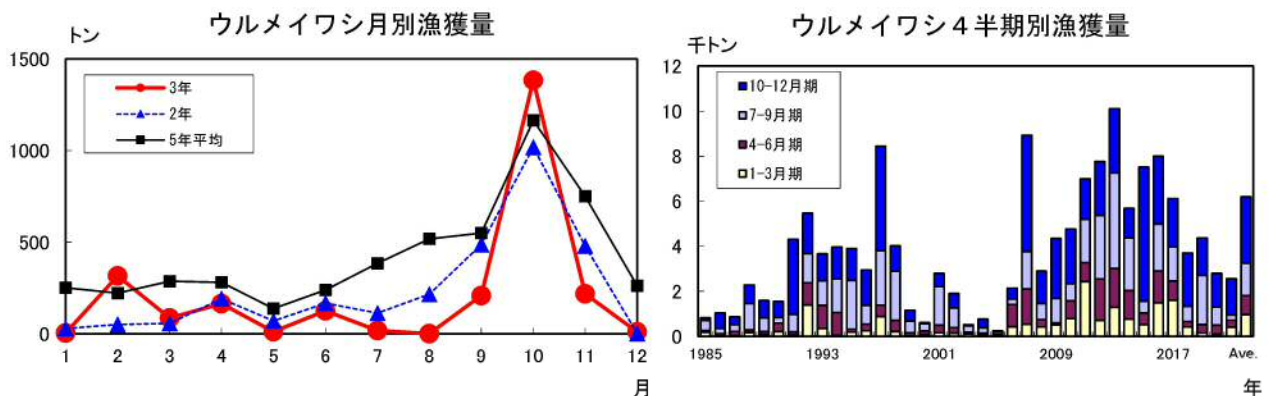


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年12月22日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2019年は13万トンとなりました。

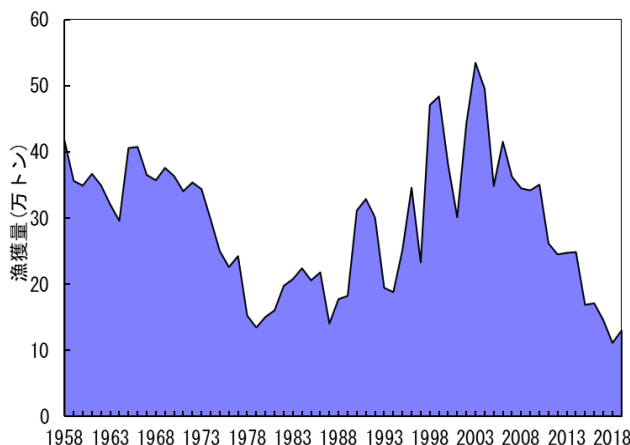


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2021年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10月に天草西沖，八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10月に開聞沖，10～11月に坊津沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽（1歳魚：2020年生まれ）主体に516トンの水揚げで、前年の45%，
 平年の124%でした。

北薩海域の棒受網では、11トンの水揚げで、前年の12%及び平年の29%でした。

3. 県内の2022年1～3月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（1歳魚：2021年生まれ）主体に、大羽（2歳魚：2020年生まれ）が混じる

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁獲量は、11月に前年・平年を上回るまとまった水揚げがあったものの、その他の月は低調に推移しています。このことから今期は、前年・平年を下回ると考えられます。

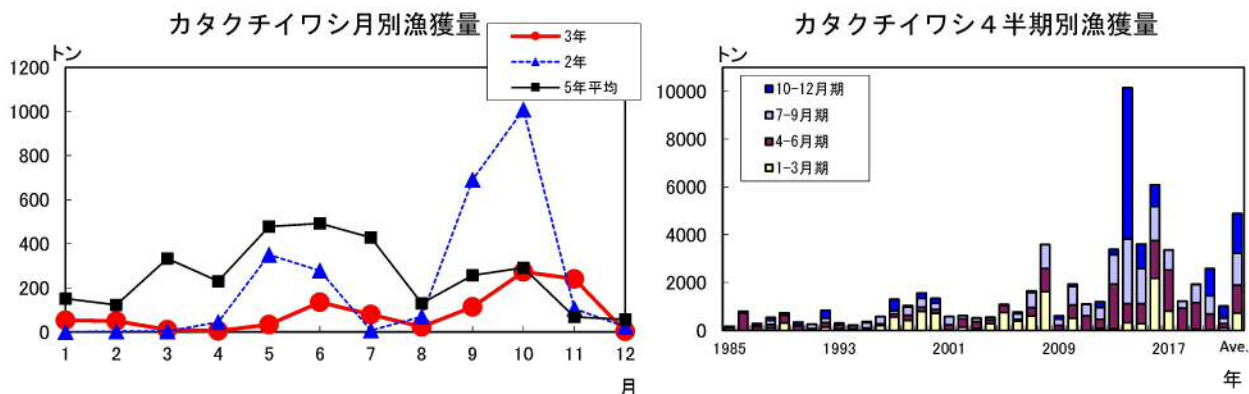


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2021年12月22日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、1999年の5,450トンをピークに減少傾向を示し、2002, 2003年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後、2004年は3,507トンと比較的好調に推移しましたが、2005年以降減少傾向を示し、2020年は1120トンとなりました。

志布志湾海域では、2007年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000トン前後で増減を繰り返しながら推移し、2020年は1228トンとなりました。

2. 2021年9～11月の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に122トンの水揚げで、前年の179%、平年の33%でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に285トンの水揚げで、前年の75%、平年の62%でした。

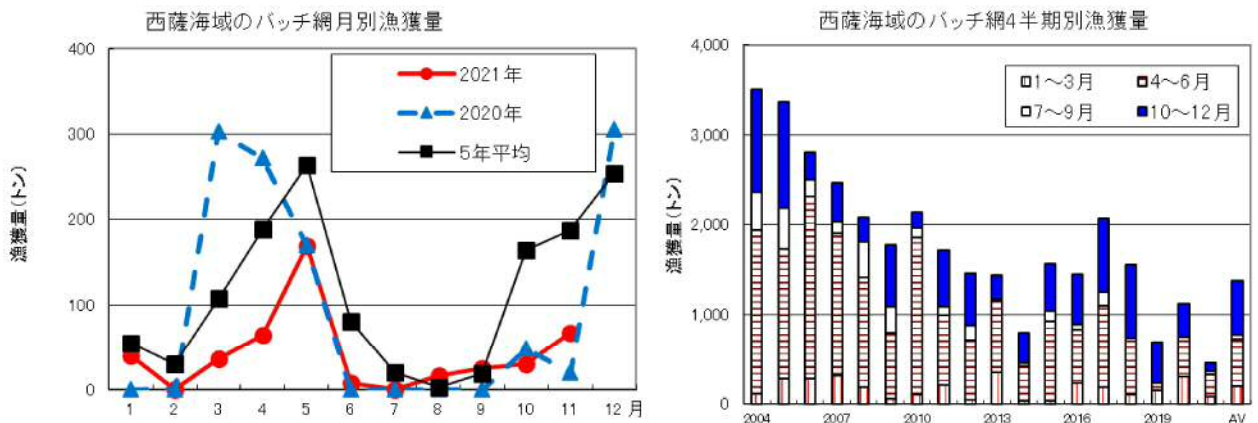


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

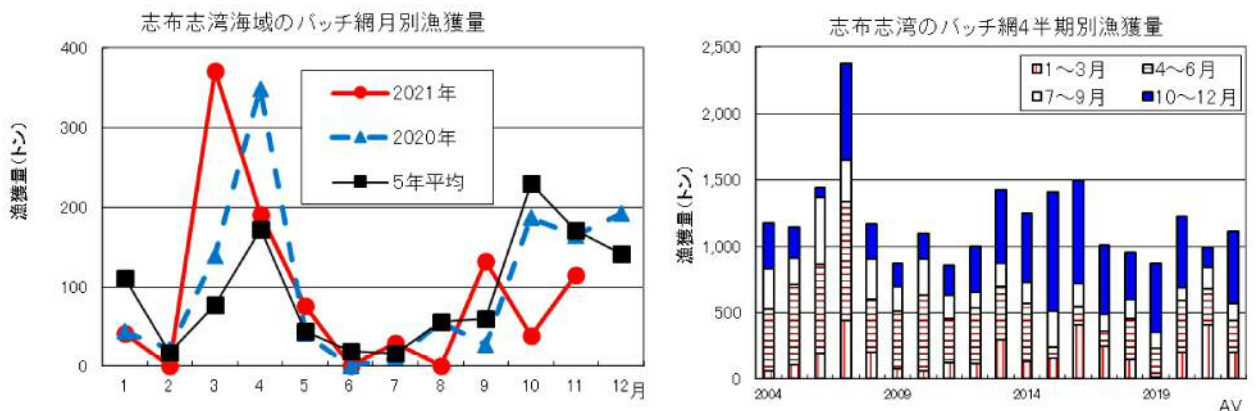


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年11月30日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

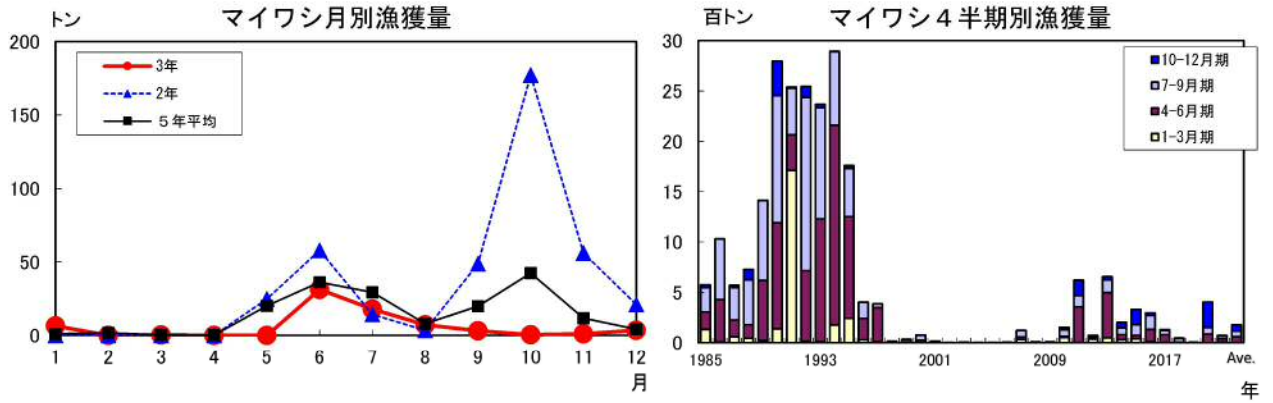


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

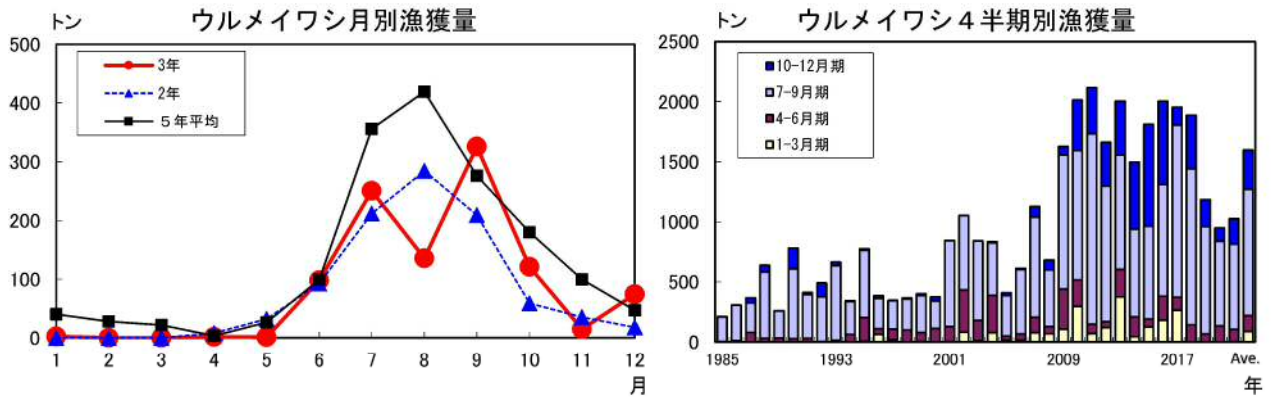


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

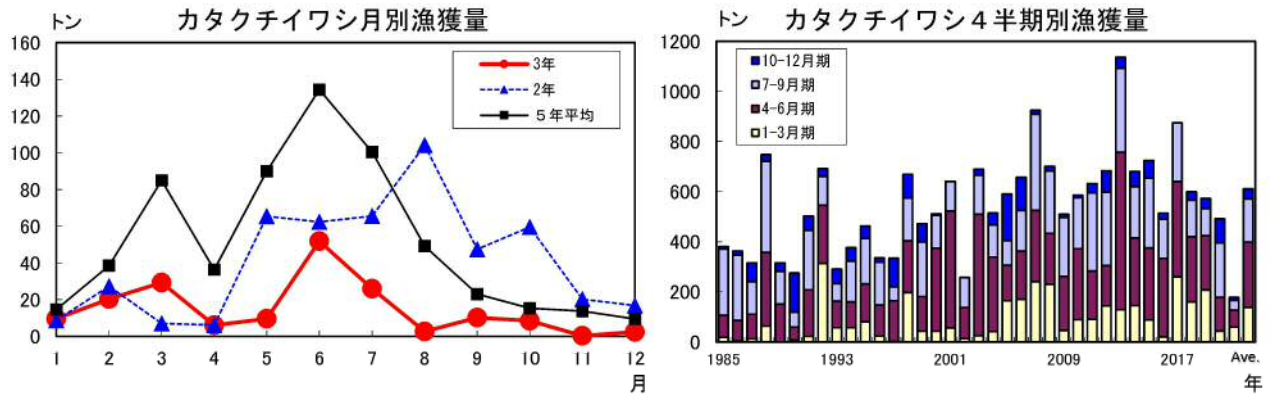


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2021年12月22日までの水揚量を使用

[ムロアジ類 (参考：漁況経過のみ記載)]

〈クサヤモロ，ムロアジ，モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は，1990年の21,700トンピークに急減し，1994年以降は1,500トンから5,000トンの間での推移しており，2020年は2,309トンとなりました。

2. 2021年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では，種子島南，西新曾根，臥蛇島，島間沖でクサヤモロ中小，小主体の漁場が形成されました。期全体で1,336トンの水揚げで，前年の158%及び平年の84%でした。

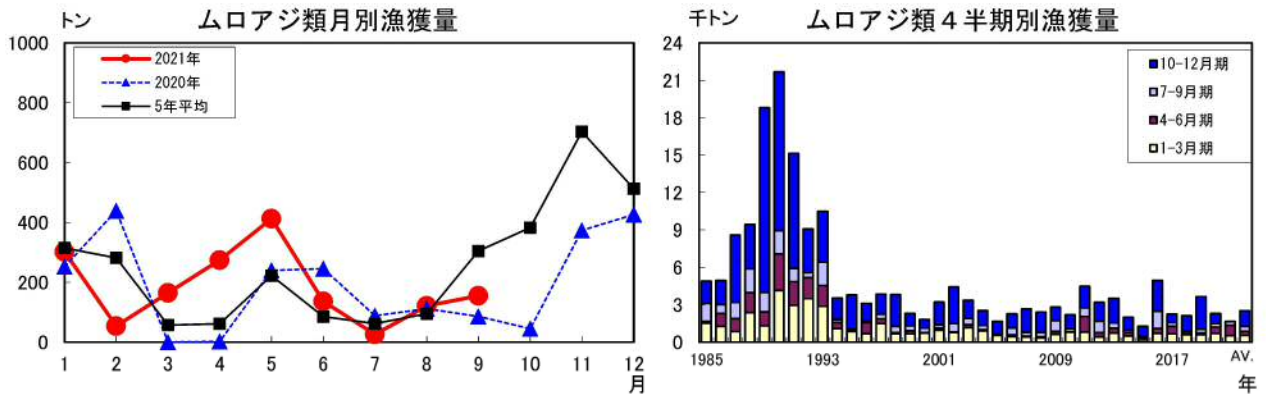


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2021年12月22日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は，1989年の5,300トンピークに一旦減少し，1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり，2007年には700トンとなりました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移しており，2020年は1,214トンとなりました。

2. 2021年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では，主に屋久島南，種子島南でオアカムロ中，豆主体の漁場が形成されました。期全体で121トンの水揚げで，前年の158%及び平年の41%でした。

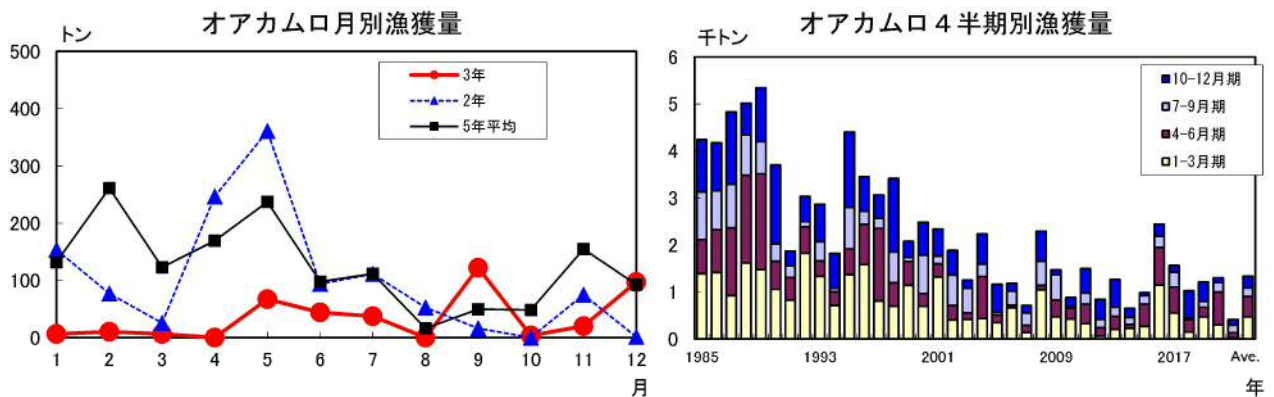


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2021年12月22日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987年から1989年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンと最高を記録しましたが、2004年以降は低調に推移し、令和2年は448トンとなりました。

2. 2021年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では、串木野沖、五島下でマルアジ小、豆主体に小規模な漁場が形成されました。期全体で68トンの水揚げで、前年の129%及び平年の109%でした。

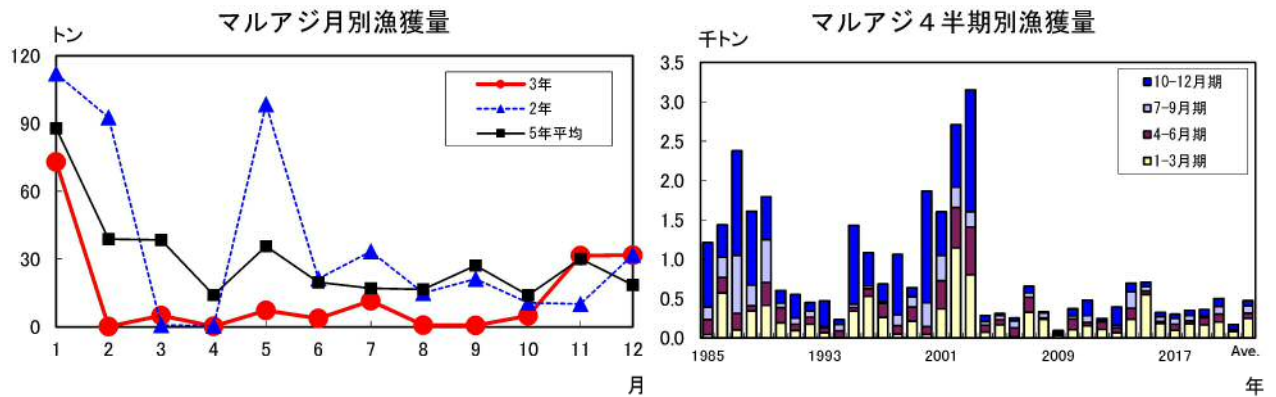


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2021年12月22日までの水揚量を使用